

地域ぐるみで動物と共生する未来づくりを！

野生動物 インター プリター

獣害対策を推進する 地域活性化のキーマン

日本エコツーリズムセンターでは「獣害問題」を、「人と動物の共存問題」として捉え、人と動物や人と人、人と自然をつなぐ役割を担う“野生動物インタープリター”を地域で増やしていくことが大切だと考えています。野生動物インタープリターは、地域や自然の案内人でもあり、地域に人を集めるプランナーでもあるからです。またそのスキルや知識は、地域や行政で野生動物保護管理を計画・実施していくうえでも必ず役立ちます。

野生動物インタープリターが狩猟をテーマにしたエコツアーやジビエ料理を味わうイベントを行えば、地域の外から大勢の人を集めたり、捕獲した獣の無駄のない活用や、地域の課題を市民が楽しみながら知る機会をつくったりすることができます。また地域の若者には、自然を相手にする新しい働き方を見せることにもなるでしょう。

日本エコツーリズムセンターでは、地域を元気にするための人材育成として、これまでエコツアーガイドやエコツーリズム地域コーディネーターとともに、この野生動物インタープリターの研修会を実施してきました。さらに獣害問題への関心を広めながら、野生動物インタープリターが活躍できる具体的な機会として、マタギツアーや野生動物ウォッチングのエコツアー、革工場見学会、ジビエ料理試食会、シンポジウムなどを先進的に行ってきました。

野生動物インタープリターは何を学び、どのような人材として地域で活躍してくれるのか？ それをご理解いただくために作成したのがこの冊子です。獣害対策や地域活性化を推進する皆さまに、お読みいただければ幸いです。



動物と人とのかかわり その歴史と現在

野生動物が農作物を荒らしたり、樹木や下草まで食べ尽くし環境を変えてしまう「獣害問題」がクローズアップされて以降、野生動物とどのように付き合っていくべきかという議論が盛んである。だが「野生動物との共生」というテーマは、そう簡単に答えが出るようなものではなさそうだ。なぜなら、私たち人間は自身の社会活動が優先されることを前提に、恣意的な姿勢で自然に接してきた。すなわち獣害問題とは、私たちの生き方を映す鏡にほかならない。

この課題について考えるうえで欠かせない土台が歴史認識の共有である。そもそも日本列島の人々は野生動物とどのように接してきたのか。その動物観はどのように変わってきたのか。以下、通史の形で振り返ってみたい。

有史以来、獣害とつきあってきた日本人

日本列島に人が住み始めた数万年前の地球は最終氷期で、気候は寒冷だった。本州以南の植生は現在の高緯度地帯のような針葉樹と、灌木・草が主体で、こうした植生に適応したナウマンゾウやオオツノジカなどの動物が主要な糧であったとされる。その後、気候は温暖化に向かい、1万数千年前の縄文早期にはドングリが実るブナ科植物などからなる混交林が広がった。この時代も野生動物は人々の重要な食料だったが、澱粉を大量に含むドングリへの依存が増えていく。

人が定住するにあたって行われたであろうと想像されるのが、森林の伐採や火入れだ。明るく風通しのよい場所に居を構えたいと思うのは、昔も今も同じである。攪乱によって生じた明るい土地に真っ先に生えるのが、クズや

ジネンジョ、ワラビといった澱粉貯蔵植物である。これらの植物は栽培化され始めたクリとともに、イノシシやシカには魅力的な存在に映ったはずだ。縄文人にとって、動物は澱粉貯蔵植物を奪い合うライバルであったかもしれない。同時に、生活圏に接近してくれる動物はたいへん都合のよい食料でもあっただろう。縄文集落を囲むように多数出土している落とし穴の遺構などからも、人の暮らしと動物との密接な関係性が想像できる。

その後、日本列島はやや寒冷になる。相前後して渡来し、飛躍的に発展したのが稲作を主とする農耕だ。現代の私たちの生活につながる基盤は弥生時代にでき上がった。家畜や家禽も導入された。この時代も野生動物は食料であり続けたが、依存比率は次第に下がり、狩猟は作物を虎視眈々と狙う野生動物から田畑を守る「農業技術」としての色合いを強めていく。獣害は農業と同時に発生した必然的現象で、近年になって突如起こった問題ではないことをまず認識しておく必要がある。

明治維新後、絶妙なバランスがくずれる

日本の自然のほとんどは、石器時代の火入れに始まり、農林業や鉱工業、土木工事などによって改変され続けてきた二次自然で、野生動物の生息環境も、常にその影響下に置かれてきた。農耕の広がりをも助けたのが農具の材料である鉄だ。鉄生産は、原料の砂鉄採取や精錬に必要な木炭づくりのために自然を大きく改変する。この攪乱も野生動物に対しさまざまに作用したに違いない。激しい森林破壊は動物たちを奥山へと追い立てたであろうし、一方で、攪乱された森林が復元に向かう過程で一時的に生じる草地や藪は、動物たちの良好な餌場やすみかになったことだろう。

近世までの日本列島は総じて動物の数は多く、人は作物を守るために垣を築いたり、収穫期には田畑に小屋を建てて交代で不寝番にあたった。かかしやしし脅しも獣害防除の装置である。地域によっては狩りの達人な者に対応を依頼した。農耕の開始以降、人と野生動物は基本的には対立的関係にあり、人側には作物への被害を前提としたある種の覚悟と備えがあった。

その緊張が緩みだすのが明治以降である。いわゆる御一新のどさくさで、幕藩時代のお留め山が乱伐や乱獲にさらされた。銃の性能が飛躍的に向上したことや、北部戦線へ送る毛皮の需要の増加なども重なり、野生動物に対する狩猟圧はかつてなく高まる。象徴がニホンオオカミの絶滅であろう。

大正、そして昭和に入っても状況はかわらない。欧米流のレジャーハンティングが 대중化していくと野生動物はさらに減少を続け、資源管理の視点から保護の必要性が叫ばれだす。動物の殺傷を禁じる触れは記紀の時代から何度も出されているが、これらは神道における穢れの概念や仏教の殺生戒を前提としたもので、資源管理を目的とした禁止措置ではない。

第二次世界大戦中は、用材調達のため森林の伐採が激化した。また、戦後示された拡大造林事業は、混交林の多くをスギ、ヒノキの単相林に変えた。森林の植生を根本から変える政策転換は多くの野生動物の生息にマイナスに働いた。ほぼ同じころ、日本で萌芽したのがエコロジー思想（自然保護運動）である。減少する一方の野生動物は「守るべき存在」として位置付けられた。動物愛護の精神も高まり、一部では狩猟行為を環境破壊や野蛮な行為とみなす空気も醸成された。

ところが、平成に入ったころから誰も予期できなかった問題が浮上する。冒頭に挙げた「獣害」である。明治以降なりをひそめていたこの問題が、再び

日本の野生動物にまつわる課題

シカやイノシシ、サルなどの獣害対策として駆除が各地で行われているが、過度の駆逐や捕獲でニホンオオカミなど日本固有の種が絶滅したことを忘れてはならない。獣害は生態系にも深刻な影響を与えるが、生物多様性の危機として、新たな獣害として名前が上がるアライグマなどの外来種も問題になっている。

絶滅のおそれがある哺乳類は34種に

環境省が平成24年8月に、日本の哺乳類の絶滅の危険度を表した第4次レッドリストを公表した。評価した160種類(亜種含む)のうち、21%にあたる34種で絶滅のおそれがあることが明らかになった(絶滅危惧IA類12種、絶滅危惧IB類12種、絶滅危惧II類10種)。

加えて新たにニホンカワウソ(北海道亜種)、ニホンカワウソ(本州以南亜種)、及びミヤココキクガシラコウモリが絶滅種と判断され、ニホンオオカミなどと併せて7種類が絶滅種になった。

農林業被害だけでなく生態系への被害も深刻な獣害

山間部の農耕地を中心にニホンジカ・イノシシ・ニホンザルなどの農業被害が発生している。これは人間が農耕を始めたときから続く問題であり、かつては田畑の脇に小屋を建てて夜間も番をしたり、石積み等のシシ垣によって被害を防いでいた。

最近顕著化してきた背景には、農業従事者の高齢化、里山環境の変化、狩猟による圧力の低下などの要因が複合的に絡まっている。

また、ニホンジカによる自然環境に対する影響が各地で大きくなっている。

ニホンジカの密度増加や分布拡大は、植生の変化、下層植生の貧弱化による土壌流失、貴重な植物の減少などを引き起こしている。対策として捕獲による個体数管理や柵による植生保護などが行われている。

地域固有の生態系の脅威となるアライグマなどの外来種

今日、外来種問題は大きな課題となっている。生物多様性国家戦略の中では、“生物多様性の危機”の一つとして、外来種問題が位置付けられている。人

間活動により国外または国内の他地域から持ち込まれた種類が、地域固有の生態系の脅威になっていることが明記されている。

2005年に特定外来生物による生態系に係る被害の防止に関する法律(通称:外来生物法)が施行された。タイワンザル、カニクイザル、アカゲザル、アライグマ、ジャワマンダース、クリハラリス、トウブハイイロリス、ヌートリア、キョン、ハリネズミ属、アメリカミンクなどが特定外来生物として指定され、飼育・運搬・放野などが制限されている。 [青木雄司]

◆絶滅危惧IA類(CR) 12種

ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの

- ・センカクモグラ
- ・ダイトウオオコウモリ
- ・エラブオオコウモリ
- ・クロアカコウモリ
- ・ヤンバルホオヒゲコウモリ
- ・オキナワトゲネズミ
- ・セスジネズミ
- ・ツシヤママネコ
- ・イリオモテヤマネコ
- ・ラッコ
- ・ニホンアシカ
- ・ジュゴン

◆絶滅危惧IB類(EN) 12種

IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの

- ・オリイジネズミ
- ・エチゴモグラ
- ・オガサワラオオコウモリ
- ・オリイコキクガシラコウモリ
- ・オキナワコキクガシラコウモリ
- ・コヤマコウモリ
- ・リュウキュウユビナガコウモリ
- ・リュウキュウテングコウモリ
- ・アマミトゲネズミ
- ・トクノシマトゲネズミ
- ・ケナガネズミ
- ・アマミノクロウサギ

◆絶滅危惧II類(VU) 10種

現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧I類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの

- ・トウキョウトガリネズミ
- ・ヤエヤマコキクガシラコウモリ
- ・クビワコウモリ
- ・ヤマコウモリ
- ・モリアブラコウモリ
- ・ウスリホオヒゲコウモリ
- ・ホンドノレンコウモリ
- ・クロホオヒゲコウモリ
- ・オヒキコウモリ
- ・ゼニガタアザラシ



石積みみのシシ垣



山地での植生保護柵



外来種のアライグマ

人と野生動物をつなぐ取り組み

日本エコツーリズムセンター主催・関連事業

野生動物インタープリター 地域ぐるみで動物と共生する未来づくりを！

野生動物との共生を探るエコツアー

伝統的な狩猟文化を伝える白神山地でマタギ文化伝承の第一人者と歩くツアーなどを実施。巻狩りなどの狩猟体験をしながら、マタギの自然観や共生の意識に触れる。古民家民宿や郷土料理も参加者に好評。日本エコツーリズムセンターではほかに「野生動物ウォッチング」「猟師エコツアー」なども実施している。



ジビエガーデン

ふだん食べることがない都会の人たちが、シカやイノシシ、クマなどの獣肉を試食できる毎回人気のイベント。専門のシェフによる調理は、獣肉に対して抱いていた臭いや堅さ、味などのイメージを覆し、一気に獣肉ファンを増やす効果がある。参加者はジビエ料理に関心をもつ一般人をはじめ、調理人、狩猟免許取得を検討する人、獣害問題に取り組む自治体関係者など幅広い。調理法や革の活用法、獣害対策などについて気軽に意見交換できる場にもなる。



大人の革工場見学

獣害で捕獲された動物の皮はこれまで捨てられることが多かった。東京・墨田区の山口産業では、それを上質な革に加工できる技術をもつ。ふだん見ることができない革加工の現場を訪ねる見学会は、獣害や狩猟を知る機会になると同時に、デザイナーや小売商など、さまざまなジャンルの人たちが集う場にもなる。



野生動物解体体験

野生動物インタープリターによる動物解体の実演。参加者も解体を体験する。野生動物の暮らす森の現状、狩猟の実情、肉や皮の利用法などのレクチャーもあり、獣害にまつわる入り口から出口までを、体験を通して知ることができる。



野生動物インタープリター研修会

野生動物インタープリターを育成する研修会を初級、中級、上級の3つのコースで実施。伝える技術、ジビエ調理、各地の獣害の現状と対策、野生動物への理解、野生動物マネジメントなどを座学や野外実習で学ぶ。



けものフォーラム

オリジナルのビジターセンターをオープンし、動物や自然について知りたい訪問者を迎えるイベント。狩猟で捕獲された野生シカの皮を使ったクラフト教室、シカ皮で作った太鼓を叩きながらの踊り、ニワトリの解体、野生動物インタープリテーション体験、動物の生態を知るコーナーなども開設し、インタープリターや狩猟関係に加え、親子連れなど一般の人も巻き込んで、動物と人との関係に触れる。



エコセン全国シンポジウム

「野生動物とエコツーリズム」をテーマに、行政、研究者、猟師、農家という異なる立場の方々が登壇。野生動物といかに付き合い、地域を元気にするエコツーリズムと結びつけていくかを報告。さらに、参加者をまじえてグループディスカッションを行い、テーマをさらに掘り下げる試みも行う。





Interpreter

NPO法人日本エコツーリズムセンター

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-38-5

TEL : 03-5834-7966 FAX : 03-5834-7972

www.ecotourism-center.jp

この冊子はセブン-イレブン記念財団の助成を受けて制作しました。

定価（本体500円＋税）